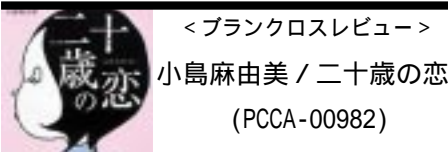


本日のブラン公演御来場感謝 レコ評特集



小島麻由美が私を虜にする理由、それはただ一点、彼女の息継ぎにある。いや息継ぎ直前の語尾にある、と云った方が正しいか。暴論なのはわかってるし、音の新鮮さもあってのことだというのは百も承知である。でも「音の新鮮さ」だけで私を夢中にさせられると思っては大間違いである。

声質は云ってしまえばちょっと実力派のアイドル歌手のそれに近い。もし彼女の曲が、たまたま入った喫茶店で流れていたとして、ら、「ちょっといいな」程度は思うかもしれないが、それ以上大した気には留めなかったかもしれない。当時腐るほど登場した70年代フォロワーの1人としても私が認識しなかったかもしれない。

だが彼女の作品をヘッドホンを通して聴き、詞の節間の息づかいを感じた瞬間、それは私を夢中にさせる。・・・大好きだ。

96年9月発表の2nd。現時点で彼女の最新アルバムにあたる。発売当時、私の友人周辺で、彼女の存在が話題になっていた。音楽に対する耳に関して信用のおける人々も様に高い評価を与えていたので、私も遅ればせながらこのアルバムを購入した。購入当日に私が記した文章を引用する。

歌謡曲？ アイドル？ 唱歌？ 私の周辺で現在話題となっている小島麻由美「二十歳の恋」を購入。ハミング、スカット。ただのアイドル歌謡にしてはあまりに私の心を動かし過ぎる。一体こやつ何者？

現在、このアルバムを試聴中のため、まだ音の全貌をとらえているわけではないのだが、昭和初期の東京の町下の雰囲気も感じられる。って昭和初期の東京なんて私に知れる由もないのだ

が っって一体何をほざいているのやら。

懐かしくて温かくほっと来る。私の中の少女がおセンチ、おセンチ云っている。正直、まだ冷静な判断が出来る。でもいい、これ。でもこれ絶対バックに60年代の強者がいるに違いない、とブックレットをじっと見る。しかしそんな様子も無し。こいつ一人の才能？ いやあ、恐るべし。

やっば、天然と天才にはかなわんのか。
97.1.3.「代表のお言葉」より

今となっては多少ピント外れな記述もあるが、確かに衝撃的だった。ただこの時点ではその衝撃の理由が彼女の「息継ぎ、語尾の唱法」にあるということ認識していない。事実「天然、天才」という言葉で逃げてしまっている。

音の第一印象としてはあが森魚の世界に近いものを感じた。彼は60年代から現在に至るまで、徐々に音楽性を変化させながら独自の世界を構築してきたが、小島麻由美はそこから日本の唱歌、日本語シャンソンという要素を受け継いだものと私は捉えた。

それから日々、私の生活の中でこのアルバムを繰り返し繰り返し聴いていく中で、ある時彼女の決定的な魅力に気付いた。いつから私は、彼女の音節の終わり、そして息継ぎを待ちわびてこのアルバムに耳を傾けていたのである。徐々に変化すること思ふがいには私はとろけるように引き込まれていった。

ああ、うまく伝えられない。とにかく聴いて下さいといしか云いようがないのだが、これは「恋」である。彼女の「息継ぎ」に対する恋である。恋に理由などない。「やさしいから」「一緒にいて落ち着くから」うまく説明できないからこんな言葉でお茶を濁しはしないかい、君も。とにかく、音階に合わせて声を出すことが唄ではない。

すっかりメロメロになってしまった私は急いで95年発表の1st「セシルのブルース」も入手。だがしかし、私はあまり夢中にはなれなかった。この時点で彼女は「息継ぎ」を獲得してはなかったのである。彼女の人気の大部分を占めていたと云われる「キューティ」「オーブ」少女がいかに好きそうな音楽、そんな感じか。彼女が私を夢中にする理由はここで明確なものとなった。

ああ、うまく伝えられない。クロスレビューでホント良かった。
(アダチ)

けっこう前の話だが、初めて聴いた時は大げさでなく「凄いやつだ」とびびりした。このアルバムに入っているのは下世話なのにクオリティは高い、イイ曲ばかりだが、小島はその全曲(10曲)の作詞作曲、7曲のアレンジ、4曲のプロデュース、アートワーク(こっちの道でも食っていいそう)とプログラミン、ピアノ、チェレスタ、ドラム(これは小生並み)等の楽器演奏を自らこなし、そして歌がすごい。声がいいのは勿論だが、歌い方も斜に構えていたり舌足らずだったりと曲に合わせて自然にアレンジしている様で、もし、彼女が曲など作らず、他人の歌を歌っているだけだともし、

充分に表現力のあるいいヴォーカリストである。

下世話(キャッチーって言うのかな?)でイイ曲ばかりと書いたが、そのアレンジはやり過ぎて下品になる一歩手前のところで巧みなアレンジがなされており、小島と共同でプロデュースしている朝倉弘一(1)のセンスの良さも相当なものだと思う。小島本人がプロデュースした4曲は、自身による比較的ストレートなアレンジで一気に聴かせる感じだが、朝倉がプロデュースした残りの6曲は、例えば、小島の舌足らずなスカットをフィーチャーした「移動式遊園地」ではアレンジと演奏にトム・ウェイツを思わせるケイブ・ゲイズ・ワゴン(2)を起用し、サーカスをテーマにした「パレード」ではニーノ・ロータ(3)が顔を出す、といった複雑ながらも洗練されたサウンドを演出して小島の才能を引き立てる秀逸なプロデュースがなされている。

ニーノ・ロータで思い出したが、アルバムタイトルの「二十歳の恋」はフランソワ・トリュフォーの映画からとられており、昨年「フレンチ狂日記」(表紙のイラストは小島が描いている)を刊行し、ゲンスブール委員会などで名も知れた永瀧達治との交友関係も、パトロンとまではいかないまでも、彼女に多少なりとの影響を与えているのは間違いないだろう。小島はロックがキライでほとんど聴いていないらしいが、彼女のルーツはちょっと前の歌謡曲と古めのイタリアやフランスの映画にあるのかも知れない。

また、このアルバムは10曲入りで30分という短さも気持ちいい。あっという間に聴き終わるがどの曲も印象は濃厚で、BGMにはしたくてもできない。つい引き込まれちゃうから。そして、ロックなんだか歌謡曲なんだかよくわからない音楽ながら、何となく(音楽を)たたくさん聴いている人でもあまり聴いてない人でも楽しめるアルバムなんじゃないかなと思う。これは、「シュガーコーティングされているが実は非常に高度な音楽」であったり、もしくは「いい曲をいいアレンジでやっている」だけの話だが、実際にやるのは本当に至難の業であり、あらためて凄い才能だと思うざるを得ない。ただ、唯一惜しい点を挙げるとすれば、それはこの「二十歳の恋」が制作された時、小島は二十一歳であったということだけである。

- 1: この人が何者なのか、全く知らない。誰か教えて下さい。
- 2: この人達についても全く知らなかったが、アコーディオンからダイコ、ユーフォoniumまで集めた9人所帯の大道芸のようなサウンドで、かなりかっこいい。
- 3: 常にごどこかでサーカスをイメージさせる映画を撮り続けたイタリアの映画監督フェデリコ・フェリーニの作品中、殆どの音楽を担当していた同じくイタリアの代表的な映画音楽家。説明するまでもないが。(オカモト)



The Beach Boys/Surf's Up (Brother/Reprise 6453)

oooと「Pet Sounds」と「Smile」のみで語ることはつまるところブライアン・ウィルソンを評価しているに過ぎず、BB5を語ることはならない。私もブライアンの狂気の淵を見たものだけが作り出せる美しい音世界にやられてしまった一人ではあるが、「Wild Honey」(67年)以降の他のメンバーの成長とこのアルバムでの充実ぶりを見逃すわけにはいかない。

おしゃれアイテムとして一面だけ取り上げてBB5を持ち上げる輩ども、「Pet Sounds」だけ消費して一緒に消えて行きなさい。マイクも云って「こんなものに誰に聴かすんだ? 犬か?」って。そうだよ、お前ら犬だ。

「Love You」(77年)と並んで年々評価が高まる70年代BB5の決定版といった良だろう。「Surf's Up」というタイトル、そしてジャケから漂う陰鬱な雰囲気とは対照的に各メンバーの優れた楽曲が並ぶ。

カールの「Long Promised Road」はモデルソングの優しいメロディとお得意のWall Coersのロックが交錯する。手触りとしては60年代中期、「Summer Days」(65年)の頃にブライアンが得意としていた手法に似ている。事実このレコーディングは、ほとんどカールひとりで行われたそう。メンバーの総スカンをくらい、内面の世界へ暴走を続ける兄の仕事は彼らはちゃんと盗んでいたのかも知れない。だったら最初からちゃんと評価しとけよ。

ブルース・ジョンストンの代表曲とも云える「Disney Girl」(1957)も。バラードもBB5の手に掛かればただの甘ったるい惚れたはれたには終わらない。ピアノにワウギターが絡むサウンド、ブルースの繊細な声にとろけてしまいそうなメロメロ感をおぼえる。

アルとマイクの共作「Don't Go Near The Water」の至んではないながらポップな音楽、アルと知らん人の共作「Lookin' At Tomorrow」の気のふれたような唄声では前者=環境問題、後者=プロテスソングというテーマを全く無視してかなりやばい気分を味わうことが出来る。私はこの時ほど英語を理解できないことに感謝したことはない。

「第9監房の反乱」に新しい歌詞をつけたロックンロール「Student Demonstration Time」はガンガンのロックでちとうるさいがサイレンのSEはブライアンのアイデアだという話を聞けば我慢できなくもない。まあ、何よりこの時期のBB5はセールス的にドン底で、優れたライブロックバンドとして活路を見出していたわけで、そんな姿勢の現れなんだろう。何せデッドと共演ライブなんてものやってたんだから。BB5も表面的イメージとは違ってクスリラリラリだしな。

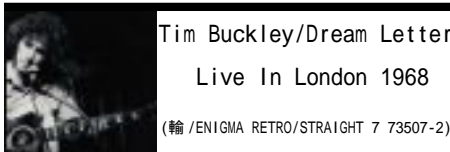
そしてそして、ラストは怒涛のブライアン作品3連ちゃん。何といっても「Smile」でボツになったタイトル曲「Surf's Up」の美しさにノックアウト。目まぐるしく変化する音世界、スローなピアノ伴奏から一気に「Child Is Father Of The Man」の高まりへ。そしてゆっくりとアルバムはエンディングを迎える。・・・嗚呼、天国。

これはアルバム通して云えることなのだが、とにかく音が良い。ひょっとしてブライアン音世界がどこまでクリアなステレオサウンドで発表されたのはこのアルバムが初めてなのではなかるうか。かつてはぼやけた映像の中で混沌の中に透明な世界を見出すというある種矛盾したような楽しみ方をしていたが、このアルバムで手に取るようにブライアンサウンドを感じ、遠く遠く続いていく興行の深さに吸い込まれていく感覚を得られるようになった。このアルバムに出会った頃は「Pet Sounds」のリアルステレオミックスを耳に出来ることは夢にも思っでなかったしね。

絶句。
「Pet Sounds」と「Smile」でブライアン・ライオンの理想の音世界を否定したメンバーは、Beatlesを初めとする世界の鋭い耳をもつアーティストたちの評価の声に自分たちの間違えを悟ったのではないだろうか。でも相手は兄弟だったり従兄弟だったり、一度自分が云ったことを引込めずらなくなったのでは。うん、その気持ちわからんでもない。
だからマイクも現在ではブライアンを擁護する発言をするんだらな。

何はともあれ、あれほどまでに「サーフィン、海、女の子、車」という自分たちのイメージを捨ててことを嫌がっていたメンバーが自由気ままに実験精神旺盛に優れた楽曲を作り上げている。もちろんブライアンも。

君も一度、B55の世界に初期から通って浸ってみなさいよ。楽しいぜ。



1966年、フランクザッツのマザーズ(正確にはそのドラマー)の引き合いにより、エレクトラからデビューして以降、よく知られているように、TIM BUCKLEY(以下Timと略)のたった8年という短い音楽的キャリアは、大まかに3つに分けることができる()。1st. ~ 2nd. アルバムにみられるフォーク/フォークロック期、3rd. ~ 6th. でみられるジャズ/アンソング期、最後は7th. ~ 9th. のソウル/ファンク期である。

どの時期のどのアルバムをTimのベストワークとするかは意見が分かれるところであるが、今回取り上げる「DREAM LETTER」は1990年に発売された、サブタイトルにあるとおり、1968年7月10日、ロンドン、クイーンエリザベスホールでのライブ盤である。68年というところ、当時のには3rd. アルバム「HAPPY SAD」のレコーディング直後で、その音楽もフォークからジャズ/アンソングへの移行の過程にある。このライブにおけるバンド編成は、基本的には3rd. アルバムにレコーディングメンバーに準じているが、ロンドンという場所柄が、ベースはPENTANGLEのDANNY THOMPSONが担当している。

この時期のTimのヴォーカルは憂いを混え、正に「HAPPY SAD」というにふさわしい声質も相俟つて、美しい一言である。はっきり言って、こんな人が長生きするわけがない。また、Timの音楽を理解し、それを表現しきるギター、ヴィブラフォン、ウッドベースの各メンバーの力量については言うまでもないが、その中でも、Timのメロディーという観念にとらわれない自由なヴォーカライゼーションに寄り添い、かつ、触発し合うLEE UNDERWOODのギターのTim同様の美しさについては特筆したい。LeeはTimのデビュー当時からギタリストとしてTimを支え、Timの死後は自らもギタリストとしての音楽活動を止め、ジャズの評論家になってしまったが、彼なくしては、Timのやりたかった音楽(特にその中期)はその半分も成し遂げられなかっただろうと言ってしまっても過言ではないほど、Timの音楽に欠かせない要素となっており、このアルバムにおいても、その重要さに変わりはない。

前置きが長くなってしまったが、このアルバムの素晴らしい

は、その所々に立ち現れる幽玄な美しさに尽きると思う。全般的にはアコースティックでゆったりとした懐の深い音楽だが、曲調により突然、消え入りする幽玄の世界が現れる。ぎりぎりのバランスとテンションを保ちながら構築されるその音楽が我々にみせるのは原気楼そのものである。

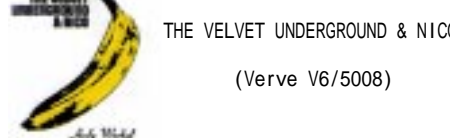
最後に、このアルバムは、その録音も素晴らしい、当時、ライブの録音を担当したエンジニア、並びに、レコーディングする際のマスタリング等を手掛けたエンジニア、プロデューサーに感謝したい。60年代のライブ録音としては最良といえる音質だと思ふ。
()本アルバムの日本盤ライナーノーツで、LEE UNDERWOODはさらに細かく5期に分けているらしい。



この邦題「駄目な僕」ってなんとかならんのかい。
ドン・ウォズが作ったブライアンのドキュメンタリー映画のサントラ。全曲B55やソロアルバムの楽曲のセルフカバーで新曲は全くなし。
娘達がコーラスに参加したりとかつて精神に障害を来すほど執拗に音にこだわり作り上げた楽曲群を肩の力を抜いてサラッと唄ってみたという趣。

これを素晴らしいと繰り返し繰り返し聴きうっとりしている自分、「ブライアンは優れたサウンドクリエイターである以前に最高のソングライターであるということ」を再認識」と結論づけることは簡単。うん、とてきれいに文章がまとまる、・・・・・・・・いや、とちてよ。
これとてとくに全盛期を過ぎて舌が回らなくなった落語家に「あのるれつるの感じが味なんだよ」って云ってるバカオヤジと一緒にじゃなえか。・・・・確かに初めてこのアルバムを聴いた時、「何か声がREMのマイケルなんかみてえだな」と突った自分が居たな。
いやいや一度で「素晴らしい」と思えるアルバムほど飽き早いわけだ、こうして繰り返し繰り返し聴いている自分にウソはないはず。
そう、良いアルバム。間違いない。

あああああああ、いいやいいいや。落語オヤジで結構結構。くやしかったらB55をきちんと聴いてこまごまでおいで。



現代に連なるアメリカ(特にニューヨーク)のロック及びカウンターカルチャー史上、屈指の価値を持つこのアルバムは、背徳的で倒錯した歌詞や、その独特なサウンドの雰囲気(ひどいものになると「味」で済まされてしまう)をもっといいかげんに評されることも多い様だが、そんなことよりも本作の核心は彼らの「魂」にある。何いってんだと言われそうだが、

要はこのアルバムが(小嶋さちが指摘したとおり)彼ら自身の過剰なまでの美意識と、かっこいいものを作るという妥協のないストイックで強靱な意志の産物だということが言いたい訳である。この美意識と強靱な意志が、後に連なる数多くのフォロワー達にも浸食されたい唯一無二のアルバムを作り上げたのであり、歴史に残るアルバムとして殆どがそういうもの(「魂」で語りたくなるような代物)だと思ふ。何となくできちゃった名盤なんてあるんだらうか?

勿論、結果的に人目を引くことになった倒錯した歌詞やサウンドは確かにすごい。これこそが異端だということもある。しかし、最も注目すべき点はそのリアルな感じにある。ストリート感覚という人もいるようだが、個人的には「ストリート感覚あふれる〜」なんて「幼稚」の代名詞くらいにしか思っていないので、本作に対してそんな事は言いたくない。ただ、背徳も暴力も彼らが歌うと異常な説得力があるなぁと思うだけである。

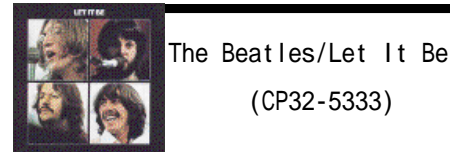
音楽的なあらゆる実験をポップの範疇で成し遂げ、ロックをアートの域にまで高めたと言われるアルバムとしてザ・ビートルズの「サージェント・ペパーズ〜」を挙げれば多いだろう。僕も特に異論はないが、本作に関しても同じ事が言えないうらむ。
尤も、ヴェルヴェットのメンバーがこのアルバムでやるうとしていたことが実験なのかどうかはわからない。彼らにしてみれば日常を音楽にしただけの様な気もする。
が、結果として完成された本作はそれまでにリリースされていたどんなアルバムとも違っていたし、本作を聴いて(広義で)のポップだと思うかどうかは人によるのかも知れないが、「サージェント・ペパーズ〜」が理解できてこのアルバムが理解できないという人はそういうのではないかという気もするのである。

なお、本作を評する際、アンディー・ウォーホルとニコの存在が取り沙汰される事が多く、事実として以降のアルバムは両者とは関わらずに素晴らしいものが制作されているが、ことこのアルバムに限って言えば、やはりウォーホルとニコの功績は大きいと思う。ニコに關しては、その存在自体がこのアルバムが放つデカダンスの象徴(実体ではない)でもあり、彼女のルックスや声の甘美な美しさはこのアルバムの持つ音楽性の本質とは切っても切れない関係にある。ウォーホルに關して言えば、そのアートワーク面での功績は言うまでもなく、ニコをメンバーに入れることをバンドに進言したこと、及び、そもそもウォーホルという人物の人脈や財力なくしてはヴェルヴェットがこういふ形(当時のヴェルヴェットは退廃や背徳、暴力を全面に押し出している上に、キャリアもない全く無名のバンドである)で世に出ることもできなかったかも知れないという点は少なくとも認めざるを得ないと思う。

録音はよくない。低音は殆ど出ないし、歪みもひどい。が、その音の悪さをもこのアルバムではかっこよさの1要素にしてしまっている。真相は知らないが、自分達の表現の一環として、あえて劣悪なサウンドを選択したのだとすれば、そういうセンスを持ち合わせたバンドは恐らくヴェルヴェットが最初だろう。

本作は、繊細な美しさと凶暴な暴力性が寝る希有なアルバムであり、その1曲1曲は最もヒップで訳の分らないエネルギーに満ち溢れている「ニューヨーク」という空間のサウンドトラックである。

(オカモト)



そもそも一枚のアルバムのレコーディング風景をまるまる映画に撮らうなどという発想自体が間違っている。音楽制作の現場に他者が存在することがクリエイティビティにつながるはずのない。
このアルバム製作のコンセプトが敢えてバンドの寿命を縮めてしまったような気がしてならない。

そもそも言い出しっぱのポールの話は「アルバム一枚分の曲をリハーサルしてライブをやろう。そしてそれを撮影しよう。ついでにリハーサル自体も撮影してドキュメンタリー映画を作ろう。」なもんだ。ジョンとポールのパートナーとしての蜜月の終焉、バンドが4人でひとつからソロミュージシャン集団へと変化する中、バンドとしての結束をもう一度強固にしたい、そのために何か刺激をというポールも気持ちもわからないではないが、アイデアの選択を間違えた。事実ジョンは当時を振り返って「常にカメラで監視されながらレコーディングをするのは苦痛だった」と語っているし、ジョージも同じ様なことを云っていた。どうもポールはビートルズを万能の神が何かと動連している節がある。

レコーディングにせよリハーサルにせよ音楽創造の現場とは神聖な場所である。楽曲に対して複数の音楽家がそれぞれ価値観を持ち合い、そしてぶつあってひとつの形にする。そのためには全員がクリエイティビティを最大限に発揮できる環境がなければならぬ。私はメンバーがその原因がわかっているストレスをためつつ、何故にそれを口にしなかったのか不思議でならない。

結局彼等はこのLet It Beセッションを経て、音楽的境界という理由ではなく、感情のもつれによって解隊という選択をする。黙っているからそうなるのだ。誰かがポールを止めなさい。まあ、そのおかげで「Abbey Road」というラストアルバムとしてはあまりに格好すぎるアルバムを作ったわけであるが・・・
そうして何十時間ものダラダラとしたレコーディング音源と、撮影フィルムが残った。パート音源や長いと廃盤状態の映画から判断するにLet It Beセッションはビートルズにとって本当に毛と羽の何ものでもなかったことがわかる。重い雰囲気にも何と外らげようとしてもむむむ「Sawberry Fields〜」を歌い出すポールなんて、聴いててこっちがたまらなくなって来てしまう。
すげえいい使ってたんだらな。そもそも言い出しっぱは君だよ。

とにかくそんな音源をよくこまごまとひとつの作品としてまとめ上げたもんだと思ふ。メンバーがフィルズベクターのストリングスのアレンジに対する批判と色々云々たらしいけど演奏しっぱなしだったのは自分たちなんだから。だったら何でジョンもジョージもその後のソロアルバムのプロデューサーを彼に頼んでんだよ。「こんなダラダラ音源を良いアルバムにまとめてくれてありがとう」位云っても誰も怒りませぬ。そんなわけで良いアルバムです。

教訓。
優れた音楽創造は、クリエイティビティを最大限発揮出来る環境構築から。